女醫の話

私達の話題が、いつか妊娠といふことの上に渡つて行つた時に、そのうちの一人の、女醫のA氏は、黒い袴の紐に絡んだ鎖を手繰つて、巧みな手付きで時間を見ながら（例の左で）次のやうなことを話し出した――。

女を診察するには、どんな場合にでも妊娠と云ふことを頭に置いてかゝらなければいけない――とはよく私達が生徒時代に教しへられた言葉でした。誰しもまさかと思ふ、そのまさかゞ時々背負ひ投げを喰はせますからね。處女でございますなんて、口先きの例證を信じる程醫者はお人好しぢやないんでしよホヽヽ。實驗がだん〳〵お人好しぢやなくなしてしまふんですもの。まさかの裏切り初めは、まだ私が學校に居ました時分です。或日のクリニツクに、寄宿舍に出入りをして居る洗濯婆さんの娘が――一寸綺麗な顔をしてましたよ――どつかのお邸に奉公をしてるとかいひましたが、乳が腫れたといつてお婆さんが非常に心配をして診て頂きたいと云ふんです。丁度S先生のクリニツクの時でした。先生はさすがに躊躇して居る娘をさし招いて、お婆さんが脇からくど〳〵容態を云ふのをフム〳〵聞いてましたつけ、ふと口髭のあたりに輕るい微笑が泛んだと思ふと、周圍をふりかへつてSchwanger Schaft!つていふんです。ぐるりの眼といふ眼はみんな見合して、みんな意外といふやうな顔をしました。獨逸語で妊娠といふことだつたのです。お婆さんはそんなことは知るよしもありませんから、さも心配さうに先生に聞いて居ます。先生つたらまた意地悪るさうににや〳〵しながら、なアにお母さん、ちつとも心配することはないよ。藥も何も要らない、濕布でもして置きあ癒つちまあつて云ふんでせう。ぐるりの低いところから高いところから、たくさんな女の眼が自分一人に注いでるので、それもきつと或る憎悪と蔑みとが感じられたのでせう、（――A氏は茲に嫉妬といふ言葉を入れるのを忘れた――）娘はやがて耳を赤くしてしく〳〵と泣き出しました。するとお婆さんはまた、娘の背中を撫でないばかりに、此娘は昔から氣が弱いものですから……なんだか氣の毒になりましてね、笑ふには笑はれず、つく〴〵娘の顔が見られましたよ。まあだ十八ばかりの何にも知らないやうな顔をしてましたつけのに。

それから私が實地の試驗準備の爲めにw先生の醫局に居た時のことです。或晩患者の家からw先生を迎へに來ました。生憎先生は往診に出て居て不在でしたから、さう言つてか

へしてやると、追付けまた使ひが來て、何誰でもいゝから來て呉れと云ふのです。其晩醫局には私と同期生のHさんとだけでしたが、Hさんの都合も惡るくて私が行くことになりました。患者と云ふのは或る軍人の未亡人で、相當な地位にあつた人でした。いづれ婦人科の方には違ひありませんが、その滓りものゝ中に小さな塊りがあるんです、それがどうしても何だか判斷がつかなかつたので、懷紙に包んで持ちかへりました。やがてお歸りになつた先生に見せると、どうでせう、それは流産だつたのです。あの時はw先生もお驚きなさいましたよ、まさかと思つてたのにねえつて。――私も成程と思ひましたね、女を診察するには如何な場合にでも妊娠といふことを念頭に置かなければいけない――こんなことを言つたら純潔な貴女方は侮辱されるやうにお思ひでせうけれど、私はもう女に依つて女を侮辱されるに馴れました。聽診器を握つたら病源を知つて、適當な藥を調合すれば私の任務は了るのですからね。患者の境遇を忖度したり、一々如何はしい病氣に腹を立てるやうな馬鹿はしません。それでも青い顔をして肩で息をしながら、産褥に居るうちに夫と別れたのだから、妊娠する筈はありませんなどゝ言はれると、だつてもそれ、現在お腹の中にピク〳〵動いてるぢやありませんか！と少しは強く言ひたくなりますね。え、そんなのが一度來ましたよ。自分ぢや脹滿のつもりで居たらしいんです。さう〳〵、是は學生時代にS先生が話したことでしたが、某官吏の夫人がお産をして、一週間目に夫は臺灣に赴任したそうです。すると夫人の肥立がよくなつて來ると同時に、だん〳〵お腹が大きくなつて來たので、親戚の者が氣付いて大騒ぎをやつた揚句、事の次第を報じてやると、間もなく夫からは「心配するな」といふ電報が來たさうです。此話を聞いた時分には、私も奇蹟を聞くやうな氣がしましたつけ。自然といふものは時々皮肉な惡戯をやるものですよ。云々

私はたゞA氏の話をのべたゞけにとゞめよう。これらの話に徒らに眉を顰める人と、或る儚さを汲み得る人とは、その各々の境遇に伴ふ心持ちに依つて別れるであらうと思ふから。

―完―

水野仙子

【入力者注】

底本と行を合せるために、半角スペースを挿入したり、句読点のフォントサイズを小さくした箇所があります。

以下の修正を加えました。（数字は底本の頁 - 行）

214-12　云ふんす　→　云ふんです

216-4　それがどうても　→　それがどうしても

初出・底本：「青鞜」大正元年九月號

テキスト入力：小林　徹

公開：令和五年八月二十四日

リンク：水野仙子作品年譜